

11) 宮の沢 2 遺跡（史跡指定地）

宮の沢川左岸低地の標高約 8 m の上ノ國八幡宮鳥居前に所在する遺跡である。昭和44年の調査で擦文土器、続縄文の恵山式土器、縄文後・晩期の土器を蒐集している。

12) 山神社遺跡

山神社跡地の裏手にあたる川沿いに昭和の初めまで砂丘があったが、地崩れごとに人骨や土器片が出土したといわれている。しかしながら、昭和16年の天の川左岸の護岸工事で砂丘は崩され、遺物などは築堤に埋められたとの記録があり、出土した多量の人骨は大八車で運ばれたとの伝聞も残っている。この遺跡は、のちに「上ノ国市街地遺跡」の範囲に包含された。

2 檜ノ沢遺跡、ほど長根 B 遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

勝山館跡の主郭の東を限る宮の沢川、西を画する寺の沢川の外側にも人為的と思われる平坦地が幾つか確認されており、勝山館跡に連なる縄張りが拡がっているとの指摘を受けていた。平成11年に宮の沢川の右岸に確認されている指定地外の平坦地について調査を行うこととなった。

檜ノ沢遺跡は、上ノ国市街地に通ずる通路を扼した要地で、小砦が構築されていたと想定されているところである（『檜山南部の遺跡』）が、勝山館と同時期と考えられる竪穴建物跡が検出され、縄張りの拡がりを示すものとされた。

また、ほど長根地区で検出した掘立柱建物跡 2 棟の柱は一辺約20cm という柱痕を残す太いもので、伝侍屋敷の倉庫群はもとより勝山館跡でも見られないものである。梁行の柱間に対して桁行のそれはおよそ半分で、2 間×6 間という規模も倉庫群と比べても大きい総柱の高床式建物が想定されている。共伴する遺物はないが、この建物跡の時期は16世紀末から17世紀初頭にあたりと考えられており、时期的には勝山館の終末期にあたる。

勝山館の終末期の建物跡としては、文禄 3 年(1594)に創祀された天の川河口の山神社とともに、慶長元年(1598)に上ノ国に置かれたとの口碑のある檜山番所が想起される。『明石系譜略伝』には「同公（松前藩六代藩主矩廣）ヨリ檜山監ヲ命セラル、官府 世人番所ト称スルハ非ナル 始ハ上ノ国ニ有ル、延宝六戊年冬アッサブ山中ノ檜樹始テ開発ニ依テ官府ヲ江差ニ移ス」（『松前町史通説編第 1 巻上』）とあることから、この建物跡は、松前藩創業期の檜山伐採事業を管掌した官府（檜山番所）あるいはその附属建物に擬せられている。

3 上ノ国漁港遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

上ノ国漁港施設用地を造成する際に、大澗ノ崎と四十九里沢台地の突端（ワシリ）に囲まれた船懸り澗（通称大澗）で確認された海底遺跡である。

出土遺物は肥前系の陶磁器を中心に、16世紀末葉から近代まで間断なく連続し、15世紀代の青磁端反皿や越前すり鉢なども一部みられる。日常生活に必要な什器類をはじめ主要な器種を網羅し、その量も多い。これらは、上ノ国市街地から大澗に至る海岸近くでの居住や、番屋生活に伴う生活廃棄物の集積と考えられている。

4 市街地後方遺跡群（埋蔵文化財包蔵地）

上ノ国市街地の後背台地に縄文時代と考えられる「市街地後方 A 遺跡」と「部落畠遺跡」、また、勝山館跡に隣接する東方台地上の畑地で縄文後期の手稲式土器を採集した「ほど長根遺跡」が埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

また、平成 8 年頃に、上ノ国市街地後背の急傾斜地崩壊危険区域内の標高20m前後の台地で、寛永通宝を含まない渡来銅銭とアイヌ玉11個が採集され、「市街地後方 B 遺跡」として登載されている。

5 四十九里沢 A 遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

大澗湾に流下している四十九里沢川の標高35mほどの右岸台地に所在する遺跡である。昭和48年の国道改良工事に伴う調査で、縄文早期から晩期に及ぶ土器、擦文土器、土師器や須恵器を確認している。

6 大澗下遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

四十九里沢A遺跡の国道を挟んだ北側、海を臨む標高5m程度の小段丘から縄文後・晩期、続縄文、擦文土器、土師器の存在が確認されている。

7 周辺遺跡の全体像

1) 縄文～擦文時代の様相【第28図参照】

勝山館跡周辺の縄文早期から擦文にいたる、各時代の遺跡の拡がりや消長などをみると、まず、縄文早期の遺跡は、標識遺跡として知られる大澗遺跡のみで、高位の海成段丘面が生活空間である。前・中期は丘陵から延びる尾根筋の平坦面や段丘面に居住域を移す。勝山館遺跡がその代表例である。後期の遺物は、宮の沢川兩岸から川尻地区の内潟の最奥部に近い清浄寺境内地までの範囲で出土しているが、あまり拡がりを持たず散在的である。晩期の遺物は上ノ国市街地遺跡の各所で検出している。上ノ国遺跡での知見も加えれば、上ノ国市街地の中央部から大澗ノ崎の基部の範囲にわたって若干の幅をもって蟬集している様子が分かる。

続縄文の土器は、上ノ国市街地遺跡の第7次調査地点と、宮の沢2遺跡である程度層位的に確認できしており、続縄文期の数少ない遺跡と考えられる。

次に、擦文時代の様相であるが、上ノ国市街地遺跡の調査で擦文土器が出土した地点は、東端は清浄寺の山門前から、第2・4・7次調査地点、宮の沢2遺跡、上ノ国漁港に続く町道大澗漁港線沿線にも拡がっている。湾内の奥まった大澗下遺跡と上ノ国遺跡を加えても縄文晩期のような分布の濃さは感じられないが、ほぼ同様の面的な拡がりを持つ。

北海道における擦文文化の終焉を推測しうる共伴遺物は、上ノ国遺跡で擦文土器に伴出した12世紀末葉から13世紀初頭の珠洲焼の第Ibの壺片だけである⁽⁵⁴⁾。擦文時代終焉の指標となるような確実な遺物の検出は確認できていないが、当地域における擦文時代の終末はおおよそ12世紀後半と考えられている⁽⁵⁵⁾。擦文時代の終末期から天の川河口部に城館が築造される15世紀中頃までの間は考古学的にほとんど空白と断言している状態にある。

2) 中近世の盛土整地の様相【第29図参照】

上ノ国市街地遺跡の調査で、市街地後背の急崖からの多量の水流による砂・砂礫の流入や、急崖斜面からの崩落、崖錐性堆積物が確認されている。この一帯は海岸低地での激浪による土地の浸蝕に加え、後背からの土砂崩れや、宮の沢川・寺の沢川の溢流や土石流が激しい「山崩れ水溢れ」が起きやすい地形であったと推測される。

これら災害防除のための治山治水や護岸、高燥で平坦な居住域確保のための盛土整地などの地形改変が積極的に行われたことが想定される。調査によって確認された中近世の盛土整地面はその一端かと考えられる。

ア 中世整地面と遺物の分布

中世の整地面は、漁港に続く新道と旧道に挟まれた畑地、宮の沢川左岸の米・文庫蔵付近、第2次調査地点で確認し、遺物も確認できている。遺物は市街地中央部へと延び、第1次調査地点で散見され、第4、7次調査地点でも出土しているが、自然堆積層からの出土であるので、中世の生活空間は宮の沢・寺の沢両河川の東西約100m前後の狭い範囲、いわゆる旧名「無碇」と呼ばれた付近に限定されるようである。

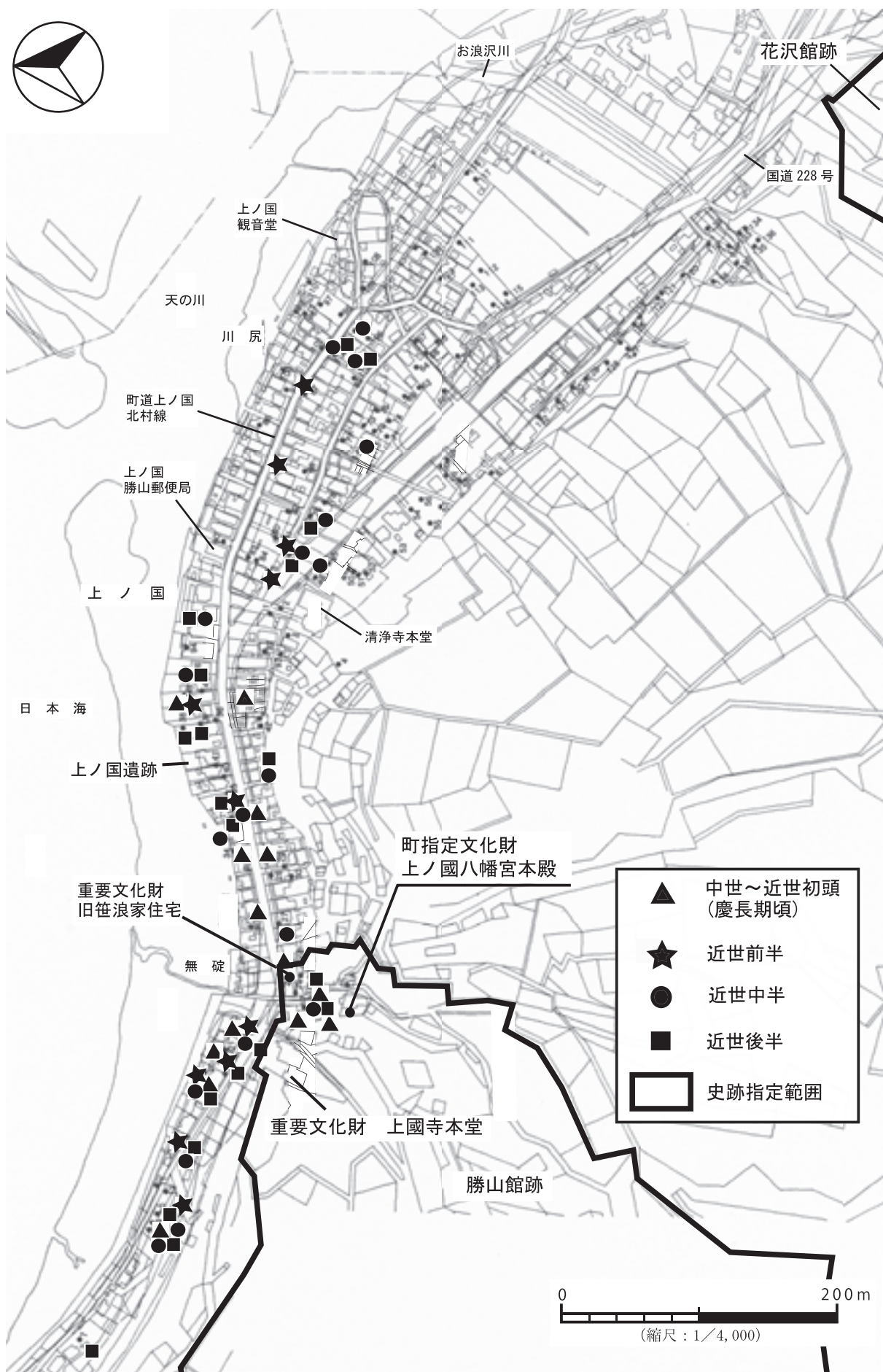
イ 近世盛土整地面と遺物の分布

上ノ国漁港に至る町道の沿線や、市街地中央部の海側から第4次調査地点までの家並みに沿って確認されている。川尻地区でも確認しているが、内潟の水際に位置しており、土留め護岸に伴う盛土整地の痕跡のようである。

近世前半の遺物の拡がり、は、「無碇」から川尻地区一帯にかけて見られるが、市街地中央部から川尻地区では散在的で、集落の中心は中世とほぼ同じ範囲、「無碇」付近にあったものと推される。中半で



第28図 史跡上之国館跡（花沢館跡・勝山館跡）周辺（上ノ国市街地）縄文～擦文土器出土分布図



第29図 史跡上之国館跡（花沢館跡・勝山館跡）周辺（上ノ国市街地） 中・近世陶磁器出土分布図

は、市街地の西半で分布がやや薄くなるが、中央部から川尻地区では分布が徐々に濃くなり、後半にもなると、川尻地区の山神社跡地付近まで遺物の密度が高くなり、住家も東へと延びていったようである。

3) 出土陶磁器の分析

各時期の陶磁器の出土量を見ていくと、勝山館においてもっとも遺物量が豊富な時期（15世紀後半～16世紀末葉）の遺物はごく少数しか確認できておらず、前後する時期に比べて少ない。16世紀末の勝山館廃絶期以後増加し、ピークは17世紀中頃までのようである。その上限は、龍泉窯系青磁碗、白磁丸皿、古瀬戸の灰釉卸目付大皿などを指標に花沢館とほぼ同時期の15世紀中頃と推定される。

輸入陶磁器は15世紀代のものから近世初頭ののものまで見るができるが、その数は少ない。15世紀代では青磁の篋書蓮弁文や無文の碗・稜花皿、白磁では高台に挟り込みが入る皿や端反皿などが出土している。近世前期に入ると舶載品は青花（染付）に限定されるようである。

中世の国産陶磁では、吉岡編年の第Ⅴ～Ⅵ期相当の珠洲すり鉢が若干出土している。15世紀後半から16世紀前半では、窖窯で生産された古瀬戸皿、肥前の山瀬窯藁灰釉ぐい呑みなどが出土し、16世紀後半では胎土目の唐津皿や大窯第Ⅳ期の天目茶碗などを確認している。

近世では16世紀末から生産が始まったとされる唐津製の皿が数多く出土する。唐津と入れ替わるように急増するのが肥前系の磁器である。碗、皿などの日用雑器を中心に出土し、近世後期になると肥前系が出土遺物の大半を占めるようになって、唐津や瀬戸美濃などを圧倒する。しかし、時代が下がるにつれて出土する遺物の量は全体的に減る傾向にある。

4) アイヌ関連遺物の出土状況

宮の沢川右岸で、イクパスイや丸木弓、高台裏にイトケバ（祖印）のある漆器、中柄などのアイヌ関連遺物が出土しているが、第4次調査地点で中世～近世初頭の層から出土した獣骨製の中柄のうち3点は、唐津胎土目の腰部露胎皿と共伴し、また、大窯第Ⅲ期鉄釉の天目茶碗と同じ層位で骨角器や獣骨が出土している。

このことは、勝山館廃絶後に館から降りてきた人々とは別に、館併行期、またはそれに先行して、数は少ないが、館直下の市街地に居住していた人々がいて、その中にまぎれもなく中柄という独特な道具文化をもち、近世アイヌ文化に繋がる系譜の中に位置づけられる人々が混じっていたと考えられる。

また、第5、6次調査地点でも骨角器の検出をみているが、近世初頭にもそれら道具文化を継承してきた人々が住んでいたことは確実で、『正保日本図（蝦夷地部分図）』（第22図参照）の「上ノ国エソ」の書き込みや、寛文年間の『津軽一統志』の記事「上の国家百四五十軒 狢も有」が教えるところでもある。

5) 小 括

出土遺物から中世における時期別の変遷をみると、まず花沢館築造とほぼ同時期の15世紀中頃に「無碇」と呼ばれる海浜部を中心に集落の形成が認められる。勝山館併行期は遺物が少なく、生活の痕跡に乏しい。このことは、集落が勝山館の構築とともに丘陵の上へ移って、館内が恒常的な生活空間として利用されていたことを示唆している。

勝山館が廃絶する16世紀末頃を画期として遺物の増加がみられるので、勝山館の廃絶とともに館に住んでいた人々の生活の拠点が海岸近くに移り、その後、ふたたび「無碇」を中心に近世の町屋として発達していったものと推測される。

出土遺物は、花沢館併行期と比較して勝山館併行期のほうが少ないが、館を含めた遺物の総量は勝山館併行期のほうが圧倒的に多い。このことは物資移入量の増大、交易の活況を暗示させるものであるが、その背景の一つに勝山館の草創期における港湾施設（船着き場）の整備が考えられる。

花沢・勝山両館と上ノ国市街地の先後関係を踏まえれば、上ノ国市街地は両館にとっていわば本拠として位置づけられるものであり、両館の存廃に深く関わっているといえる。そういった意味において、上ノ国市街地遺跡の実態解明は花沢・勝山両館の実像把握に繋がっていくものである。